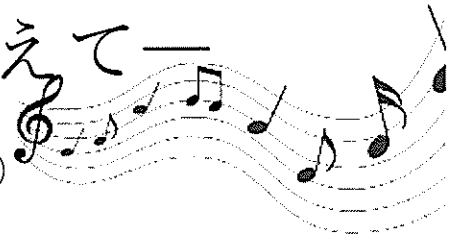


紡がれた音—時空を超えて—

大学院リサイタルシリーズ③



2020年 10月 3日(土) 11:00 開演 (10:30 開場)

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

RUI FENG (ピアノ: 飯野 明日香)

篠笛による、歌舞伎音楽の旋律「田舎笛・いなかぶえ」「聖天・しょうでん」「空笛・そらぶえ」

中国横笛、笛子による独奏曲「夕陽簫鼓」

能管による、能、歌舞伎の旋律「名乗笛」「楽」「中の舞」

篠笛による独奏曲、長澤勝俊作曲「翠煙」

笛子とピアノによる「春湖」

押見 純代 (ピアノ: 宇田川 日和)

ギヨーム・ルクー/ヴァイオリン・ソナタ ト長調

第1楽章 Très modéré - Vif et passionné (きわめて中庸に - 活発に、そして情熱的に)

第3楽章 Très animé (きわめて生き生きと)

服部直士

L.v.ベートーヴェン/パイジェットの歌劇「水車小屋の娘」の二重唱「わが心もはやうつろになりて」による6つの変奏曲 WoO.70

松平頼暁/アルロトロピー

F.ジェフスキー/ウィンズボロ紡績工場のブルース

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。



■曲目解説

篠笛による、歌舞伎音楽の旋律「田舎笛・いなかぶえ」「聖天・しょうでん」「空笛・そらぶえ」

平安初期、日本に中国から膨大な文化が移入された時期よりも以前から、日本では横笛が親しまれてきた。大和言葉の「ふえ」という単語が漢字の「笛」に当てたとされていることから、雅楽が確立する前にも笛は演奏されてきたが、漢字の入る前の文化は記録として残されておらず、伝統音楽の中に当時の音が継承されているものを参考にするのみである。素朴な旋律が日本の笛の特徴であり、歌舞伎の下座音楽で演じられる3つの篠笛のパターンを演奏する。

中国横笛、笛子による独奏曲「夕陽簫鼓」

「夕陽簫鼓」は中国の十大古典の一曲で琵琶曲の代表作の一つである。この曲は、唐朝（7～10C）「春江花月夜」から由来し、春の寂しい夜、東山に上る月、西岸に揺らめく景観などを表している。この曲は清代（14C）「今曲考証」の中に詳しく記録されており、素朴なメロディー、流暢なリズムをもち、風格を備えた曲調を展開する。「夕陽簫鼓」はピアノ、木管五重奏、中国楽団等の編曲があるが、当公演においては笛子演奏家、陳悦による笛子独奏曲として演奏する。

能管による、能、歌舞伎の旋律「名乗笛」「楽」「中の舞」

日本の芸能文化に大きな影響を与えた、武士の作り上げた「能楽」から横笛（能管）を取り上げる。侍の作り上げた音楽らしく、飾りを排し、淡々と演奏する能楽由来の3つの楽節を演奏する。「名乗笛」は脇方の登場にあしらわれる能管の独奏曲。「盤渉楽」とも呼ばれる雅楽から影響を受けた曲であり、優雅な曲調を持つ。本来、鼓、大鼓、太鼓との合奏として演奏されており、「中の舞」は、数ある能楽の「舞い」の楽節のうち、もっとも多く奏される曲である。

篠笛による独奏曲、長澤勝俊作曲「翠煙」

長澤勝俊は多くのファンを持ち、演奏家からも聴衆からも支持される現代邦楽の代表的な作曲家である。邦楽の基本線をしっかりと掴み、また長澤節ともいわれる抒情性も特徴として挙げられる。多くの邦楽器の合奏曲、室内楽作品などが残されているが、篠笛の独奏曲は極めて少ない。今回は横笛の独奏曲「翠煙」を選曲した。

笛子とピアノによる「春湖」

「春湖」は東北の民間歌謡の素材を入れ、春の雪解け時期の漁民の生活を絵巻として描いている。爽やかな曲調から始まり、雄大なプロローグ、カッコーの眩き、波間を抜ける船影など、春の川辺の風景を描いている。笛子としては長い（低い）調子の管を演奏し、重厚な音色を発揮する。多くの笛子演奏者達のレパートリーとして演奏されている笛子の代表曲である。

ギヨーム・ルクー(1870-1894) /ヴァイオリン・ソナタ ト長調

第1楽章 Très modéré - Vif et passionné / 第3楽章 Très animé

心が惹き込まれる序奏。音楽の扉を開けると、様々なモチーフが織り重なり、光に彩られた世界が広がっていく。ギヨーム・ルクー。この作曲家を知る人は多くないであろう。ベルギーに生まれたルクーは、フランスのポワティエで学んだ後、1888年にパリへ移り住み、ベルギー出身のセザール・フランクに師事した。フランクの没後は彼の高弟のダンディに師事し、1891年、ベルギーのローマ賞コンクールにおいて彼の作曲したカンタータ《アンドロメダ》が2等賞を得る。ルクー自身は2等に納得できず受賞を辞退したというが、その曲に、非常に感銘を受けた同郷ベルギーの名ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイがルクーに作曲を依頼し、ヴァイオリン・ソナタが誕生した。1892年のことである。この曲はイザイによって初演され、彼に献呈された。ルクーは将来を囑望された。しかし、2年後に腸チフスにより24歳で夭逝する。



大変な情熱家でありながら、師フランクのように献身的な性質を持ち、全力で音楽に向き合った。特に後期ベートーヴェンとワーグナーの音楽を研究し大きく影響を受けている。彼の音楽は、ルクー自身が述べている言葉「私は自分の音楽の中に己の魂のすべてを投入すべく苦心する」に表れている。全身全霊を傾けて作られた音楽に心が震えるようだ。柔らかな情感とほとぼしる情熱、逡巡と決断、静と動。フランクの循環形式を取り入れたこのヴァイオリン・ソナタは、いくつもの循環テーマが、調性やテンポを変化させ、異なる表情で各楽章に繰り返し現れる。第1楽章は、序奏つきのソナタ形式で書かれている。誰をも包み込むような温かい光を思わせるテーマで「始まり」を語り掛ける序奏。対照的に主部は、複数のテーマを随所に織り込みながら、ヴァイオリンとピアノが互いに情熱的に重なり合い、先を求め行き、再び平穏な世界へ戻る。第3楽章は冒頭で決意を語ると、ピアノによって奏される動きに乗り、活気に満ちて前へ突き進む。中間部で第1楽章の序奏が現れ、恍惚的な響きの中で逡巡するが、遠くから繰り返し語り掛けるピアノの動機により目覚め、再び前へ進みコーダへ向かう。そして輝く光に向かって駆け抜ける。このソナタは、全力を投じて創作し、短い人生を駆け抜けたルクー自身を表したように感じられる。若くして世を去ったことが惜しまれる作曲家である。ベルギー出身の同郷音楽家の縁に紡がれて誕生したこの珠玉のヴァイオリン・ソナタを、大切に演奏したい。

L.v.ベートーヴェン/バイジェットの歌劇「水車小屋の娘」の二重唱「わが心もはやうつろになりて」による6つの変奏曲 WoO.70

この主題、「Nel cor piu non mi sento」はイタリア古典歌曲集としてお馴染みの方も多いただろう。バイジェットらしい、美しいアリア旋律につけられた変奏は、曲順を追って華やかになる。第6変奏のみ47小節と長い。他は主題と同じ20小節で、主題の和声進行も忠実に踏襲されている。

第1曲 右手でテーマをヘテロフォニー的に変奏する。

第2曲 左手に移った16分音符の音型にのせて、軽やかに進む。

第3曲 両手で上行形のアルベッジョを奏でる。

第4曲 短調となり、2度下行の音型が印象的である。

第5曲 左手のテーマを右手の3連符が華やかに装飾する。

第6曲 前半は両手で16分音符で快活に、後半はテーマが左手で手の交差によって現れる。

松平頼暁/アルロトロピー

終盤で突如として引用されるショパンの「雨だれ」が、その異質性ゆえに大きな効果をあげており、松平作品における引用の代表的な例の一つとされる。この引用が示唆するように、本作品は連打（タイトルは「同質異型」の意）を核とし、8つの部分からなる。冒頭に連打が提示され、しばらくクラスタと連打が組み合わせられた後、「タ」や「パ」といった声とともにやや点描的な連打が現れる。叫び声を伴うクラスタの暴力的な連打、「シュ」という無声音と *ppp* による連打の組み合わせ、それまでに登場した要素の総合的な提示を経て、「雨だれ」に至る。最後はピアノのなかに向かって拍手を行う。

F.ジェフスキー/ウィンズボロ紡績工場のブルース

1930年代の歌である。元の歌詞は、ノース・キャロライナの織物工場の労働状況を歌っている。全4曲からなるバラードの第4曲目。



■プロフィール

RUI FENG

本学大学院修士課程における研究テーマは、日本の横笛の演奏法を研究すると同時に、笛子（中国の横笛）と日本の横笛との比較研究としている。特に笛子に葦の膜による振動効果があることに対して、日本の横笛にはその構造が見られないこと、日本においては7世紀前後からの芸能、音楽が保持されているのに対して、中国では古典として保存されているものが限られること、また日本の唱歌（しょうが）による継承の有無など多角的に研究を進めている。今回のリサイタルに向けて、研究の進展と共に実演として聞いて頂ける演奏会を企画して、日本の篠笛・能管と、中国の笛子を取り入れたプログラムを策定した。

押見 純代 (Sumiyo Oshimi)

愛知県出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を卒業。音楽物語制作の実績により2019年4月東久邇宮記念賞を、社会貢献音楽活動の実績により同年11月、東久邇宮文化褒賞を受賞。これまでに、ヴァイオリンを小林すぎ野、Ray Chang、西尾ヨシ子、廣岡克隆、公門俊之、安藤貴子、室内楽をJan Loeffler、川田知子、羽川真介、ヴィオラを安藤裕子、ピアノを山本緑各氏に師事。保育園、幼稚園、地域の子育てサロン、老人ホーム、デイサービスセンター、介護福祉施設、病院等において、社会貢献を目的としたコンサートのプロデュースとアウトリーチの演奏活動を行っている。また、多くの方々に広く、音楽を身近に楽しんでいただけるように、クラシック音楽をはじめ、日本古来の音楽や世界の様々な音色を用いた音楽物語の創作、絵本や紙芝居と音楽のコラボレーション作品を制作し、物語コンサートを企画開催している。

服部直士 (Naoto Hattori)

兵庫県出身。11歳からピアノを始める。神戸市立須磨翔風高等学校を経て、大阪音楽大学音楽学部音楽学科管楽器専攻(ユーフォニアム)卒業。現在、洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修士課程器楽専攻(ピアノ)2年次在籍。第19回「長江杯」国際音楽コンクール管楽器部門大学の部において最高位受賞。同コンクール第23回ピアノ部門大学の部において優秀賞受賞。アマチュア第22回阪神淡路大震災復興記念KOSMAソロ管楽器コンクール音楽専攻クラスにおいて金賞受賞など他多数受賞する。2016年11月に守山俊吾氏指揮 Elise Shine Orchestra(現輝音 Orchestra)と W.A.モーツァルトのバスーン協奏曲を共演。2018年5月、同年12月にユーフォニアムソロリサイタルを開催。また、自身がピアノとユーフォニアムを演奏し、クラシックの普及を目的とした「Pianium(ピアニウム)」としても活動。学内外でのソロ、室内楽等の伴奏ピアニストとしても活動。ピアノをこれまでに小栗よう子、北川恵美、鹿喰登江、鳥居知行、若杉亮各氏に、現在、安嶋健太郎氏に師事。室内楽を菅井春恵氏に師事。伴奏法を原田愛氏に師事。Adele D'aronzo氏による歌曲伴奏法のマスタークラスを受講。ユーフォニアムを曾我香織、中西勲両氏に師事。Anthony Caillet氏のマスタークラスを受講。